

モダニズムの水平線～世界文学シンポジウム～ プログラム

9:30～

受付 (立命館大学衣笠キャンパス平井記念図書館 1F カンファレンスルーム)

10:00～11:00 基調講演 I (司会：阪本佳郎)

「連なり越えゆくものを感じる～石牟礼道子の「脱近代」 渡邊英理 (日本語文学・大阪大学)

モダニズムの語に、石牟礼道子を結びつける時、その蝶番としてヴァージニア・ウルフを招来すべきだろう。水俣の小さな農漁村の「主婦」としての「労働」の傍ら、歌を詠み、詩を書き、『苦海浄土』をはじめ数々の作品をものした石牟礼は、女が小説を書くためには「自分ひとりの部屋」が必要だと唱えたウルフの末裔とも言えるからだ。実際、石牟礼がその文学で一貫して投げかけるのは、近代的価値観への問いであり、この「脱近代」への志向において所与の近代を問い直す運動性をも有したモダニズムと一脈を通じる。

その代表作とも目される『苦海浄土』『椿の海の記』には、開発主義とその基底をなす生産主義に抗する思想が追究されている。その思想は、連なり越えゆくものへの感受とも言うべきものだ。また、そこにあらわれる独特のフィクション観は、『アニマの鳥』『春の城』などの作品においても実践されている。生産に抗する思想文学に照明をあてると同時に、石牟礼がいう「もうひとつのこの世」が文学的、思想的に追究するところを紐解いてみたい。

11:10～12:30 パネル①日本文学の接続点 (司会：田尻芳樹)

「西脇順三郎とグレーム・グリーン～回帰するモダニズム、あるいはレイト・モダニズムについて」佐藤元状 (英文学、映画研究・慶應義塾大学)

西脇順三郎の詩人としての戦後のブレイクスルーが、翻訳や研究を通じた T. S. エリオットへのコミットメントによってもたらされたことは、比較的読み取りやすい。西脇にとってモダニズムの詩学を体現していたのは、エリオットであったからだ。だが、『近代の寓話』(1953)や『第三の神話』(1956)を精読していくときに、気になるのは、グレーム・グリーンへの並々ならぬ執着である。本発表では、後期モダニストたるグリーンとの「情事」が、西脇のモダニズムの詩学に何をもたらしたのか、について考察していきたい。

“Global Modernism and Contradictory Time in Nogami Yaeko’s ‘Yama-uba’” Ryan Johnson (比較文学・東京大学特別研究員)

Viewed from a global standpoint, do Nogami Yaeko’s wartime writings appear “modernist”? “It is not my fault. The world simply changes too quickly!” declares the protagonist of her 1942 story “Yama-uba.” Fearing that she will never complete her travelogue of her visit to Europe, the protagonist laments that Japanese time is out of sync with European time. Yet in the story these European and Japanese temporalities gradually divide into smaller time scales, revealing the contradictions of the concept of temporality. By reading Nogami’s story in relation to contemporaneous English, French, and Japanese theories of modernity and temporality, this paper aims to clarify the relation between Nogami’s wartime work and global modernism.

「プロメテウス」から、芥川龍之介「地獄変」へ」澤西祐典 (作家、日本文学・龍谷大学)

芥川龍之介の「地獄変」は、名画「縛られたプロメテウス」を題材とするピエール・ルイス「芸術家の勝利 (緋衣の男)」を下敷きにしている。本発表では、天界から火を盗んで人類に与えた神プロメテウスから、炎熱地獄を描いた「地獄変」への題材の変化に込められた意図を読む。また、佐藤春夫や谷崎潤一郎などの同時代言説における芥川のルイス受容の相違や、材源のあるなかで芥川にとって「創作」が意味するものをさぐる。

13:30～14:50 パネル②よみがえるポエティックス (司会：秦邦生)

- ◇ 「そよ風と熾火～現代京都西陣のヘテロトピア、コロナ災禍を経ての再会と言葉」阪本佳郎 (レーマニア立命文学・立命館大学特別研究員)
- ◇ 「アクアリウム」佐藤元状
- ◇ 「国際あなた学会」澤西祐典
- ◇ “Dogs and Miracles” 吉田恭子 (クリエイティブライティング・立命館大学)

15:10～16:30 パネル③モダニズムの対位法 (司会：佐藤元状)

「ハンナ・アーレントとラルフ・エリスン～1950年代のユダヤ系知識人と黒人知識人の対立」大形綾 (現代思想、比較文学・京都大学研究員)

20世紀を代表する政治哲学者ハンナ・アーレントは、一九五九年に「リトルロックについての考察」と題する論文を発表した。そこでアーレントは、一九五七年にアーカンソー州で生じた黒人生徒の人種統合校入学をめぐる抗争(「リトルロック高校事件」)に、独自の見解を呈したのである。厳しい批判に晒されながらも考えを改めることはなかったアーレントは、黒人作家のラルフ・エリスンに対してのみ、自身の態度を和らげた。なぜアーレントはエリスンに譲歩したのか。二人を結び付けると共に切り離した諸要素について考察する。

「Kazuo Ishiguro, *The Unconsoled* (1995)における〈普遍性〉の夢」秦邦生 (英文学・東京大学)

第四長篇小説 *The Unconsoled* の構想にあたって Kazuo Ishiguro は「夢」をモデルに時空間の歪んだ世界を造形したと述べているが、主人公のピアニスト Ryder が訪問する匿名の街は、街路、公園、住民たちの名前など中央ヨーロッパを思わせる特徴を多く備えている。20世紀末の世界秩序の変動に回答しつつ小説家として〈普遍性〉を追求した Ishiguro が、本作の設定においてなぜ「夢」と「中欧」を融合しているのかを考察したい。

「J.M.クッツェーとJ.S.バッハ」田尻芳樹 (英文学・東京大学)

クッツェーにとって最も重要な音楽家は間違いなく J・S・バッハである。講演「古典とは何か」が明らかにしているように、彼は少年時代にバッハを通じて「古典」と触れたのだ。その後も小説『悪い年の日記』、『イエスの学童時代』などにバッハは流れ込んでいく。本トークでは、彼の研究対象だったベケットの音楽趣味にも触れながら、クッツェーとバッハの関係について思索をめぐらせる。

16:40～17:40 基調講演 II (司会：吉田恭子)

「英語圏文学とポーランド人」西成彦 (比較文学・立命館大学)